

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

沈黙と抵抗：

日系アメリカ文学に見られる1世と2世の女性たちの
葛藤

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2004-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/743

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



沈黙と抵抗 —— 日系アメリカ文学に見られる1世と2世の女性たちの葛藤

篠田実紀

19世紀末から20世紀初頭にかけて、経済的成功を夢見た多くの日本人がアメリカ合衆国に移住した。しかし彼らを待ち受けていたのは、決して明るい未来ではなかった。当時のアメリカ社会では、低賃金で雇われ、白人の労働市場に進出するアジアからの移民は、白人主導の経済を脅かす“Yellow Peril”として疎まれる傾向にあったが、日本からの移民も例外ではなく、先に移住して排斥された中国人同様、歓迎された存在であったとはいえない。更に不幸なことには、この時代は日清・日露戦争を経た日本の軍事拡張期にあたり、日本からの移民は経済的のみならず政治的な脅威としても警戒され、移民の制限などの差別を受けることになる。日本からの移民へのアメリカ政府の不当な取り扱いのため、日本国内では反米論が起こり、アメリカへの移住の道が閉ざされた日本は、経済問題解決のためアジア侵略に乗り出し、その結果アメリカでは更なる排日感情が高まるという悪循環に陥った。緊張の度合いを増していく日米関係の板挟みになったのが移民たちであった。1941年、真珠湾攻撃が起こり、太平洋戦争が勃発すると、アメリカ西海岸の日本人たちは敵国外人として立ち退きを命じられ、収容所での集団生活を余儀なくされる。収容された日本人（1世）と収容所で青春をすごした彼らの子供達（2世）にとって、収容所での体験はその後の人生に深い傷を残す。

このような歴史をもつ日系アメリカ人は、同じ“Yellow Peril”のアジア系移民でも、戦争でアメリカと同盟関係にあった中国からの移民と大きく

異なり、敵国である自分の生国への誇りを公然と持つことができなくなる。

1世は、アメリカで生き延びるためには、日本の文化や伝統を守ることは諦め、2世にアメリカの教育を奨励してアメリカで成功する機会を与える道を選ぶ。2世もまた、日本よりアメリカの方が優れているという意識を持つようになり、日本語の習得率は低く、年を重ねるにつれて英語を優勢言語として話すようになる。かくして、英語を話し、アメリカ寄りの教育を受けてきた2世と、英語をほとんど話せず日本の価値観で行動する1世との間には深刻な意思疎通の問題が生じてくる。

収容所で青年期を過ごした2世たちの中には、戦後、英語で文学作品を書き、日系アメリカ人の1世と2世の世代間葛藤を描く者もあった。本論では、この世代の3人の日系アメリカ人2世女流作家 Wakako Yamauchi, Hisaye Yamamoto, Mitsuye Yamada の作品から、それぞれ、少女期末期、思春期、成熟期という、異なる年代の2世女性の主人公とその母の關係に注目し、その葛藤を論じる。

1) 自我のめざめ——*And the Soul Shall Dance* の Masako

はじめに、1924年カリフォルニア州生まれの日系2世作家 Wakako Yamauchi が1977年に発表した戯曲 *And the Soul Shall Dance* (以下 *Soul*) をとりあげ、この戯曲の基となった1972年発表の同名の短編小説 “*And the Soul Shall Dance*” (以下 “*Soul*”) とも比較しながら、日系2世の娘 Masako と1世の母の關係に注目する。これらの2作品はともに、カリフォルニア州 Imperial Valley という砂漠の地を舞台に、恵まれない土地で細々と農業を営む日本人の家族が織り成す人間ドラマである。中心となるのは、愛する男性との仲を引き裂かれ、死んだ姉の夫で異国に住む男性との不本意な結婚を強いられた Emiko (Mrs. Oka) の悲劇であり、彼女への関わり方を通して他の登場人物の生きざまや人間關係が浮き彫りになっていく。¹

1 登場人物の名前については、短編と戯曲では異なるものがある。短編では特別な名前のな

短編“Soul”と戯曲 *Soul* の中心的テーマは同一であるが、登場人物の設定や内容にいくつかの相違点がある。重要な相違点として Masako の年齢が挙げられる。“Soul”では、40歳位の Masako が “It’s all right to talk about it now.” とことわった上で、自分が9歳の頃の出来事を語るという設定になっている(19)。実際には中年の語り手ではあるが、全体的には9歳の少女の視点で物語は進行する。これに対して *Soul* の Masako の年齢は11歳に設定されている。更に、短編で登場する Masako の弟が、戯曲では登場しない。短編では、9歳の Masako の視点で見た Oka 家の話が中心となるが、戯曲は、Masako の年齢を引き上げて Oka と先妻との娘 Kiyoko の年齢に若干近づかせ (Kiyoko は短編では14歳、戯曲では15歳)、弟を除外することにより、Murata 家と Oka 家という、同じ年頃の娘一人とその両親という構成の二つの家族の明暗を効果的に対照することに成功している。不毛の土地でも家族が一丸となって努力し、円満に見える Murata 家と、諍いの絶えない Oka 家。そして、Oka と Kiyoko が Murata 家に羨望の念を感じていることは、戯曲の中で Oka が Emiko に対し、もし亡き先妻の Shizue をここに連れてきていたら、うちは貧乏ではあっても Murata 一家みたいに幸福になれたらと毒づき(179)、Oka 夫妻の大喧嘩に耐えきれず家を飛び出してきた Kiyoko が Hana に対し、何故自分の両親はここであなた達のように精一杯の努力をする (“make the best of it”) ことがないのかと嘆く(192) ことから窺える。

表面的には幸福そうに見える Murata 家ではあるが、Hana と Masako の間には微妙な不協和音が感じられる。この不協和音は、短編よりも戯曲の方で顕著に聞こえてくる。前述の年齢設定の違いを反映し、2つの作品の Masako の性格付けは異なり、その差異は母との関係において最もよく表れ

い Masako の父母は戯曲ではそれぞれ Murata, Hana と名付けられ、短編の Mrs. Oka は戯曲では Emiko である。ここでは、混乱を避けるため、登場人物の名前は、戯曲のそれに統一するものとする。

る。僅か2歳の違いではあるが、人格形成過程の9歳と11歳では、心身ともにその発達段階に大きな差がみられる。一般的に子供は、自我の未発達な幼少期には親の保護を必要とし、親には絶対の信頼を寄せ、親の言動を素直に肯定するが、9歳頃を契機に親から独立し自己確立しようという意志が現れ始め、11歳頃になると自己主張をして親とぶつかり合うようになる。日系2世の場合は、更に、1世の持つ日本的価値観と自己がアメリカでの生活を通して否応なく身につけたアメリカ的要素との間での葛藤が加わることになる。

“Soul”の9歳のMasakoは、心の中ではOka家の問題を敏感に察知しており、Kiyokoに対しても、期待していたような自分と同様の少女ではなくどちらかといえば自分の母の領域に近い女性であったことに深い失望を覚えながらも、自らは言葉を発することはない。手を口に当てて笑うKiyokoの仕種に夫に叱られたときの母の姿を垣間見て不快感を覚えても、それを言語化することはない。9歳のMasakoの中で確立してきた自我は、母が娘に伝えんとしてきた「日本人の女はかくあるべし」という日本的価値観を、感情の明白な表現を重んじるアメリカ的価値観で否定してはいるが、否定する感情を言語化することを許さないのは、周囲の和を重んじて自分の感情を押し殺すという、他でもない日本的習慣であろう。即ち、9歳の少女の沈黙は、母の価値観や生き方に疑問を抱きながらも、保護者である母に異論を唱えることの危険性が、自分に正直であるという自律性に勝るということを本能的に察知した故に生じるのである。

これに対し、もちろん対話を基盤とする戯曲という性質上必然的ではあるが、Soulの11歳のMasakoは雄弁である。表面的には母の言い付けをよくきく「良い子」ではあるが、肝心なところで母に意見する。冒頭で風呂場を火事で焼失したことで母に何度も責められても素直に謝らず、“I didn't do it on purpose.” (156, 160)と返し、母が、日本人ならだれでも抱いていると思込んでいる日本への帰国願望も、娘は自分にはないとあっさり否定する(175)。上述のKiyokoの仕種についてもはっきり嫌いだと言う(188)。他

方 Hana は、娘が時に日本的な習慣や感情に対して否定的な反応を示しても、強く責めることはほとんどない。たとえば Masako が日本に行きたくないと言うと話題を変え、Kiyoko の仕種に関しては、日本では女の子はそのように振る舞うもので、Kiyoko だって Masako の仕種が嫌いかもしれないという一般論を言うにとどまる。日本への帰国が経済的に不可能と分かり始めた Hana は、娘が日系アメリカ人として反日感情の強いこの地で生きていかなければならないという厳しい現実を無視して日本的価値観を強制することの危険性を意識しているといえる。

しかしその一方で、Hana が感情的には Masako がアメリカ人化していくことを憂えているということが垣間見られることもある。たとえば Masako が読書する場面に注目してみよう。まず、戯曲の冒頭で火事の原因をつくって母に叱られた Masako は、ベッドの上で本を読み始め、Oka が訪れても最小限の挨拶をただけで、ずっと読み続けるが、それに対して母は、“Are you reading again? Maybe we'd still have a bath if you…”と非難する (160)。それでも Masako は本を読み続け、Oka の帰宅後母に “Help me clear the table.” と言われてはじめてしぶしぶ (“reluctantly”) 読書をやめる (164)。別のところでは、日系人がアメリカで直面する現実を知らない Masako が、東から来て何もない “prairie” にやって来た白人入植者の西部開拓の本を読んで、自分達日系アメリカ人のようだとすると、母は、自分達はここでは “nobody” であり、あなたが読んでいるものの中にはあなたが決してわからないものもあるのだと答える。娘には英語の本をどんどん読んで学歴を積んでアメリカで成功してほしいものの、アメリカ人の視点からしか書かれていない本を読む娘がしだいにアメリカ寄りの価値観に染まっていくのを許したくはない、という 1 世の複雑な気持ちがここに感じられる。母によって読書の限界を指摘された Masako は、“I can dream though.” と言うが、母は、夢見ることに對しても否定的であり、“Sometimes the dreaming makes the living harder. Better to keep your head

out of the clouds.”と、しっかりと現実を見据えて生活することを説く。母の徹底した現実主義を受け入れられない娘は、きわめて率直に “That’s not much fun.” と返す。母はそのたしなみのない反応を不快に思っているだろうがそれをあからさまにはせず、Kiyoko がきたら二人で “fun” をたくさん体験できるよと、娘を激励する (182)。

逆境の中で生き抜くには、読書や夢などの非現実的で想像的な “clouds” に惑わされず、眼前の現実を直視して清貧の日々に徹するべしという Hana の哲学は、日本での夢のような思い出の世界に生き、アメリカでの一切の現実を否定して酒や煙草に逃避する Emiko の生き方とは正反対である。Hana は、Emiko の不適応に言及して、異国での生活の難しさを竹の比喻を用いてコメントする。

She can't adjust to this life. She can't get over the good times she had in Japan. Well, it's not easy. But one has to know when to bend... like the bamboo. When the winds blow, bamboo bends. You bend or crack. Remember that, Masako. (175)

どうしてもアメリカに適応しようとしなない Emiko は、風が吹いてもしなわぬ竹である。日本に帰る夢のみ追い求め、最後まで現実に妥協することを拒む Emiko は、この予言どおり、最後には “crack” し、破滅することになる。風にしなう竹が比喻するもうひとつのことは、服従であり、その背後には、妻は夫に、子は親に従うべしという、日本の家父長制的思想が見え隠れする。自分の意に沿わなくても夫の言い付けには基本的に従う Hana は、しなう竹であり、Oka に命じられてもコップひとつ渡さない Emiko はしなわぬ竹である。そして、この比喻は、時に親に反論する Masako の不服従をやりわりと戒めたものであるということも指摘しておきたい。

Hana と Masako の不協和音は、Kiyoko の登場の場面で、最もはっきりとしてくる。Hana は、Oka が Kiyoko という娘を日本から呼び寄せると知って、Masako にはいい友達ができるだろうと楽観していたが、全く逆の結果になる。Masako 自身、自分と同じ日本人で年齢的にも近い Kiyoko と友達になれると期待していたが、いざ実物が登場すると、あまりにも自分の期待と異なる存在である Kiyoko に深く失望し、互いに好意を持ってないと察知し、ひとり席をはずして家の外に出てしまう。Hana は、娘の突然の無礼に困惑し、家に入るように言うが娘は入ってこない。遂にしびれをきらした Hana は、“Ma-chan” とやさしく呼びかけながら、何とか諭して娘を中に入れようとするが、Masako は母に、Kiyoko は “my friend” ではなく “your friend” であり “old lady” だと言う。Masako は、Kiyoko が、自分の友達であるどころか、家の中にいる Murata 夫妻や Oka 同様の “old people” の一人であり、“old people” ばかりのところには行きたくないというのである。しかたなく Hana は Kiyoko の方を外へ呼び、Kiyoko は如何にも日本人らしく「忠実に」 (“dutifully”) 出てくる (187-88)。母が家に入るように呼んでも従わない Masako と、年長者に出てきてくれと言われればとりあえず従う Kiyoko の態度が象徴するように、日本から来た Kiyoko の中にはごく自然に根付いた行為が、アメリカ生まれの Masako には、おそらく母が厳しく言い聞かせてもなかなか身につかないというのが皮肉である。ここで Masako は Kiyoko という存在を自分ではなく母の領域に属する “old lady” であると認識しているが、彼女が “old lady” で言わんとしているのは、単に大人の女を意味するばかりではなく、母は常に回想し、帰ることを待ち望むが、自分にとっては異国である日本の女性でもあるという点を指摘しておくべきだろう。

Kiyoko を取り囲んだ1世たちによって、自分の訪れたことのない日本の話題ばかりが懐かしげに交わされ、レストランの料理やウエイトレスの態度等のアメリカ文化が貶される会話を聞きながら家の中に居づらくなった

Masako が、何も言わずにそっと席をはずすという行為は、1世の生き方に賛同できなくてもそれを明白に表明できず、かといって黙って耐えて1世に迎合することもできない日系2世の曖昧な立場を象徴しているともいえる。友達となるはずだった Kiyoko の登場は、自己の中にアイデンティティとして芽生えつつあるアメリカ的な要素を否定されたような疎外感を Masako に与えるという皮肉な結果になってしまう。

短編では、Masako が家を出るという場面はなく、代わりに母が Kiyoko を連れて行って今後の生活について長時間話したとあるが、その際に “My mother took her away.” と表現されている (20)。表面的には、友達になろうとしたのに母が Kiyoko を自分からとってしまったので落胆したようだが、それではあとに続く、Masako が Kiyoko に失望し、好意を抱いていないという記述と矛盾する。Masako の落胆の本質は寧ろ、Kiyoko に母をとられてしまった (She took my mother away.) ということではないだろうか。戯曲において、家の中での日本の話に最も嬉々として興じているのは、他でもない母であり、Masako は、母と自分の中にはないが母と Kiyoko の間には存在する何かを感受している。まだ母から完全に自立することはできない Masako にとって、母はおそらく何のものにもまして大切な存在であろうが、アメリカ的な要素をもった自我が目覚めはじめた彼女は、自分が母の望む従順な日本的「良い子」にはなれないことを察知している。風呂場の火事も、もとはといえば Masako が母の言うことに従わなかったことが原因であった。母の重んじる日本の美徳を備えたと思われる Kiyoko の登場は、おそらく Masako にとってはひとつの脅威となり、彼女が Kiyoko を好きになれないもうひとつの理由が、そのような危機感であるとも考えられる。

家の外に出た Masako が母の呼びかけに応じない直接の理由は、そこで Emiko と話していたからである。Hana は、Kiyoko の登場が、Masako だけでなく Emiko の孤独をも解消してくれるはずだと思っていた (175) が、これも誤算であった。Emiko は、家の中の人々同様1世であり、日本を恋

い焦がれアメリカを嫌う気持ちはおそらくだれよりも強いと思われるにも拘わらず、Kiyoko を中心に日本の思い出話に湧く家の中に入らない。一見最も距離がありそうな Emiko と Masako であるが、登場人物のうちこの二人だけが外にいるという点を考えるとときわめて興味深い。自己の回想の世界に生き、だれに対しても心を通わせないかにみえる Emiko であるが、実はこれ以前にも、Masako に対してだけ会話らしい会話を行っている。Emiko に話しかけられたとき、Masako は、たまたまひとりで “And the Soul Shall Dance” という歌のレコードを聴いているが、Emiko には何も言っただけとはいけないという母の言葉を気かけながらも Emiko との会話に引き込まれていく。歌の歌詞に興味を示した Masako に対し、Emiko は、いつか自分は一人で日本に帰るのだという “secret” を打ち明けている (171)。更に注目すべきは、Masako が、このときのことを後に自分の両親に言うように、“She tried to make friends with me.” と直感していることである (175)。Masako が、常識的には母の “friend” であるべき年代の Emiko が自分と “friend” になろうとしていたと感じていたということは、同年代の Kiyoko に対しては、いい “friend” になるだろうと期待していたにも拘わらず、実際に会うと自分の “friend” ではなく母の “friend” であると感じることと対照すると意味深い。

Masako と Emiko の共通項は、心を通い合わせることでできる存在がなく孤独だという点である。Masako は、後に Kiyoko と仲良くなり、私達は友達だと言う (197) が、二人の会話の大半は外国語の練習であり、この二人が実質的に友達といえるかどうかは疑問である。Emiko は、Kiyoko に話しかけることもなく、かえって不憫な Kiyoko への溺愛に走る Oka に疎まれて顧みられず、更なる孤独感を味わう結果になってしまう。孤独な Masako と Emiko は、互いのある意味での “friends” になることができたかもしれない。しかし、その機会は Hana によって潰される。前述の Emiko と Masako の家の外での会話は、Hana の登場により中断された。更に、

Emiko が Masako に着てほしいと自分の着物を持ってくる場面でも、Masako は着物を欲しがり、父に聞いてみるよう母に頼むが、Hana は拒む。もちろん、表面的には、Emiko はこの着物を Murata に売って日本に帰る資金にしようとしており、それだけの金を払うことができないから Hana は拒絶するのであるが、もしここで Murata に頼んでいたら別の結果になっていたということも考えられる。Murata は、Emiko の接客態度がよくなないと Hana が愚痴をこぼすと、それは Hana の方に原因がある、お茶がほしけりゃそう頼めばいいだろうと返すなど、Emiko に対しては Hana よりも好意的な見方をしており、また、火事の件でも厳しい母とは対照的に娘には寛大な態度を見せていたから、Masako が着物がほしいと言えばいくらかの金と引き換えに着物を受け取ったかもしれない。Hana が Murata に相談しなかったのも、Murata なら了承するのではないかという直感があったからではないかと思われる。Emiko が去ったあとに Murata が来て、Masako が説明しようとしても、Hana は、“Nothing.” をくり返す。Masako はそれ以上主張することなく、父がとめ忘れた水道の栓を止めに行く。Murata は、妻の態度に、家族の中で唯一男性である自分には入れない、母と娘のふたりだけの世界が成立してしまっただと感じる(204-208)。しかし、はたして母と娘の結びつきは深まったのであろうか。Emiko の一件で Hana のとった態度についての Masako の気持ちは言語化されることはないが、母が彼女の説明を阻むとその場を去るという行為が、Emiko を助けてやらない母への沈黙のうちの批判を表しているとも解釈できる。

戯曲は、望みを断たれた Emiko が砂漠の中で歌い舞う場面で終わるが、ここにも Masako は登場し、Emiko の動きを無言で見つめている。短編の当該箇所を見ると、Masako は、“when my mother's migraines drove me from the house in unbearable self-pity, I would take walks in the desert.”とあり、Emiko の異常な姿を見たのもこのような心理状態で砂漠へやってきたときのことだったことがわかる(24)。母に女性特有の周期で

やってくるいらいらした気持ちをぶつけられてもそれに真っ向から抵抗できずやり場のない“self-pity”を抱きながら砂漠を歩く Masako が、やはり自分を疎外する家にいることがいたたまれない Emiko と遭遇するというこの場面にも、Masako と Emiko の孤独という接点が見出される。荒涼殺伐とした砂漠の情景は、二人の孤独な心理を象徴する舞台設定である。

Traise Yamamoto が指摘するように、この戯曲は、Hana と Emiko という二人の女性を対照しながら、いずれの女性に対しても最終的な評価はせず、二つの異なる“female resistance”の可能性を呈示する(179)。夢や想像に抵抗して現実に生きようとする Hana と、現実に抵抗して夢や想像に生きようとする Emiko の生き方は、日系2世としてこれからの人生を切り拓こうとする Masako の前につきつけられた二つの可能性である。Emiko は、どんなに風が吹いても決してしなうことのない竹だったために、折れてしまう。しかし、他人に妥協や迎合をせずに自己の意志を貫き通す彼女の生き方は、Hana にはない強さであり、ある意味で、母と異なっても正しいと思う意見を表明するという Masako のアメリカ的価値観と共通するものである。踊り終わった Emiko が落としたセイジの枝を Masako が拾うという行為には、Masako が今後 Emiko の生き方をいくらか引き継いでいくという可能性が暗示されている。しかし、Masako が、Emiko に惹かれ、自分との共通点を本能的に感じながらも、彼女に声をかけられないというのは、やはり母の現実主義を否定することのできない2世の迷いの表れである。この曖昧な幕切れは、2世の Masako に課された、二人の1世女性たちの生き方の間でバランスを保ちながら舵取りをしなければならない複雑な人生を象徴している。

2) とまどい——“Seventeen Syllables”の Rosie

1921年生まれの Hisaye Yamamoto の短編小説“Seventeen Syllables”(1949)は、日系アメリカ文学の中で最も頻繁に論じられ、アジア系アメリ

カ文学全体においてもよくとりあげられる問題作のひとつである。この短編は、14-15歳の思春期の日系2世の少女 Rosie を主人公とし、彼女の眼を通して、彼女自身とその両親のドラマが語られる。“Seventeen Syllables”では、表面的には、俳句づくりに没頭する母の話と、使用人のメキシコ人少年 Jesus との出会いに心ときめかせる思春期の Rosie の話という、別個の筋立てを並べながら、最後に母が自分の過去の恋愛の話を娘に打ち明けるところで、二つの話がつながるように仕組まれている。

この短編の舞台はトマト畑であり、季節は真夏のトマトの収穫期の直前に設定されている。このような時間設定は、Rosie が恋愛を経験し、女性として成熟して最盛期を迎えようとする姿と適合し、Jesus とのはじめてのキスに有頂天になる彼女は、真紅のトマトのような若々しいエネルギーに満ちあふれている。これに対して、彼女の母 Mrs. Hayashi (Tome Hayashi) の俳名 Ume Hanazono は、日本で春先に咲く梅の花を表す。この名前は、物語の中では“Ume Hanazono’s life span, even for a poet’s was very brief—perhaps three months at most.” (9) と語られるように、俳人としての短命さを象徴するが、その背後に、美しいが儚く散る春の夢のような彼女の青春をも暗示しているといえる。娘の Rosie も薔薇の花の名を持つが、薔薇には梅のようなたおやかな儚さはなく、はるかに強く逞しい美しさを感じさせる。Jesus たちと土にまみれながらトマトの世話をする Rosie には、1世の母のような日本的繊細さはないが、日系アメリカ人として、様々な人種のるつぼの新天地に根ざそうとする逞しさがある。

Rosie は、*Soul* の Masako と同様、細々と農業を営む日系1世の両親の一人娘であるが、Masako に比べると特に母との直接的な意見の衝突は少ない。しかし、衝突がないのは、Rosie が従順なのではなく、Masako のように自分の意見を隠さず表明する時期を過ぎ、母に言うべきこととそうでないことを弁える能力がついて、言うべきでないことは黙して語らないか、相手の気を損ねない言い方を用いているからだと考えるのが妥当であろう。指摘

すべきもうひとつの点は、Rosie と母の間の言語の壁である。多くの日系 1 世たちが、子供達がアメリカで成功することを夢見て教育に力を入れ、英語習得を奨励した結果、親子間で使用言語が異なるようになる。多くの場合、1 世は日本語で思考し、片言の英語しか話せず、2 世はその逆となる。Elaine Kim は、多くの 2 世が育ったアメリカ社会では英語が優勢で日本語は劣勢言語であるという風潮があり、更に 1 世たち自身の中にある英語を話す能力が成功につながる要素だという意識が暗黙のうちに 2 世に伝わるため、2 世たちは日本語を不必要な言語であると感じるようになったと指摘する(130)。親子の使用言語が同じ場合には、子供の成長につれて親子の会話がスムーズになり、複雑なニュアンスを含む対話も可能となるが、日系 1 世と 2 世の親子では、2 世が成長し、その思考が複雑化するにつれて世代間の言語の溝はかえって深まり、意思疎通や相互理解に重大な障害を生じる。たとえば冒頭で、母の俳句の日本語を理解していなくても Rosie は、率直にわからないとは言わず、“Yes, yes, I understand.” と答える。これに対する母の反応は、“her mother, either satisfied or seeing through the deception and resigned, went back to composing.” とある(8)。母は娘の嘘をたぶん見抜いているが、それを責めず、黙っている。狐と狸の化かし合いのようなこの場面には、1 世の母と 2 世の娘の文化的差異とそれに対する彼女達なりの暗黙の取り決めが見えてくる。Rosie の嘘は、正直に言った場合の母の落胆を防ごうという、彼女なりの善意と配慮に基づく。母の沈黙は、娘が俳句の日本語の微妙なニュアンスを理解できるはずもないという事実は嘆くべきものであっても、娘がアメリカで生き残るためには共通言語を失うという犠牲はしかたないという諦めであり、譲歩である。

Rosie の両親の Hayashi 夫妻は、*Soul* の Murata 夫妻とはかなり異なる。“Seventeen Syllables” の衝突は、母娘の間ではなく、夫婦の間で起こる。その点では、Hayashi 夫妻は *Soul* の Oka 夫妻と似ているといえる。ただ、衝突とはいっても、*Soul* における Oka 夫妻のような激しい家庭内暴力の描

写はなく、夫婦の内部に深く沈潜して表面化しない心理的敵対である。Mr. Hayashi は、自分が無学で無教養であるという点に強い劣等感を持つという点で、Murata よりは Oka に近いキャラクターである。Mrs. Hayashi は、Hana と Emiko の双方の要素を持った女性であり、Emiko のように妻や母としての現実を放棄してはいないが、Hana のように想像の世界を拒絶する徹底した現実主義でもない。そして、Emiko が現実を受け入れなかったことが Oka との不和の原因であったように、“Seventeen Syllables”でもまた、Mrs. Hayashi の俳句という、現実を離れた趣味が夫の不興を買うことになる。Sau-ling Cynthia Wong は“Necessity”と“Extravagance”というテーマからアジア系アメリカ文学を解釈している。この二つの言葉は、Maxine Hong Kingston の *The Woman Warrior* で、語り手の叔母の不倫とそれに対する村人達の制裁について語られる冒頭の“*No Name Woman*”からとられたもので、Wong は、女性は“Necessity”に徹すべきであり、“Extravagance”の領域に足を踏み入れたとき、制裁を受けることになるというアジア的道德律を、アジア系アメリカ文学に適用して論じる。彼女の言葉によれば、俳句や歌舞音曲などの芸術は“Extravagance”であり、アジア文化では男性にしか許されない自由である。Mrs. Hayashi (Tome Hayashi) は、俳句を作るときは Ume Hanazono というペンネームを使うが、これら二つの名前は、彼女が、家事や農業を中心とする日々の仕事 (“work” = “Necessity”) とそれ以外の “play” と呼んでもいい部分 (“Extravagance”) の二つに自己分裂を起こしていることを示すと Wong は言う (167-175)。“Seventeen Syllables”では、Mrs. Hayashi の自己分裂について、“Rosie and her father lived for awhile with two women, her mother and Ume Hanazono.” とある (9)。そのような分裂に対して Rosie や Mr. Hayashi がどのような感情を持ったかは明らかにされないが、Mr. Hayashi がそれを快く感じていないということは、物語の随所にある彼の行動から感じ取られる。

まじめだが芸術には無縁の無骨な Mr. Hayashi は、妻が俳句の話をする度に除け者にされる。Hayano 家を訪れる場面では、Mr. Hayano と Mrs. Hayashi が俳句談義に興じている傍らで、Mr. Hayashi は写真雑誌 *Life* を読んでいる。高尚な言語芸術である俳句について語る妻とは対照的に、英語を解するとは思われない夫は、雑誌の説明の言葉の意味すらわからず、ただ手持ち無沙汰とバツの悪さを隠すために写真の部分だけ見ていると思われる。帰宅後、Mrs. Hayashi は、今度は姉夫婦とまた俳句の話、Mr. Hayashi は風呂に入る。そして、遂に Mrs. Hayashi の俳句が当選し、優雅な日本語を話す Kuroda という男性が、賞品の広重の額を持って来ると、Mr. Hayashi は、始めは Rosie と二人で畑仕事をしているが、トマトの収穫の最もたいへんなときに妻がいつまでも家の中でこの男性と俳句の話をしていることに業を煮やし、男性を追い出し、額を火にくべてしまう。Mr. Hayashi は、ほとんど言葉を発することなく、たまに話すのは畑仕事のことばかりである。彼は俳句の話に没頭する妻の注意を促す際にも常に仕事のことを持ち出し、Wong の言う “Necessity” に徹した人物として描かれている。Mrs. Hayashi の行動や感情はあまり示されず、俳句に関する会話をする姿が静的に描かれるのに対して、Mr. Hayashi の感情は、言葉ではなく行為により動的に表出される。その行為は、多くの場合、Hayano 家から帰るときの乱暴な自動車の運転や最後に額を燃やす場面に現れるような暴力的なものとして描写される。

King-Kok Cheung は、その著 *Articulate Silences* の中で、抑制された表現の中で多くの要素を示唆する Yamamoto の手法を “rhetorical silence” と呼ぶ。Cheung は、Yamamoto が、“Seventeen Syllables” において、2世の少女の視点で語られる “overt action” の陰に1世の両親の “covert drama” を秘めた “double-telling” の手法をとると論じる。物語の進行につれ、俳句づくりという道楽に耽る妻と仕事しか頭がない夫という相容れない夫婦のミスマッチが明白になり、読者は、「何故彼らは結婚したのか」「何

故これほどまでに Mrs. Hayashi は俳句に熱をあげるのか」という疑問を募らせるようになる。これらの疑問は、また、Rosie の疑問でもあると思われるが、この点について Cheung は、Rosie という 2 世少女の不確かな語りを用いて読者に疑問を抱かせ、語られない “covert drama” を探らせることにより、作者は読者に日系 2 世が 1 世の沈黙に対して持つ “pain and frustration” を追体験させているのだと指摘する (29)。語りは、若くて世間知らずの 2 世が認識し得る範囲内に限定されるため、1 世の両親、特に母の敵対的な心理状態は最後まで言語化されることはない。この作品には *Soul* における Oka 夫妻のような激しい家庭内暴力の描写はなく、Rosie と Mr. Hayashi の行動を中心として淡々と話が進行する。語りは Rosie の認識の域内に限定されているため、彼女の不在のところで行われているかもしれない両親のバトルは表面化せず、背後にある大人の心理の泥沼、特に根源にある母の過去の秘密は封印されている。しかし、主として父の行動から伝わる両親の間の不穏な雰囲気は Rosie の知覚のフィルターを通して少しずつ読者に伝わってくる。表面の節約された客観的描写の内部に深い意味を秘めた Yamamoto の語りは、まさしくこの短編の重要なモチーフである俳句の手法を彷彿とさせるものである。

Rosie は、思春期に入って性的に目覚め始めた少女で、Elaine Kim の表現を借りると、“half-child, half-woman” である (161)。Rosie とメキシコ人少年 Jesus のロマンスは、読者にのみ明かされる秘密として語られる。Jesus と初めてのキスを交わしたときの Rosie の衝撃は、“a helplessness delectable beyond speech” と表現される (14)。かくして子供から大人の女性への一步を踏み出した Rosie を待ち受けているのは、Mrs. Hayashi からの、母としてではなく一人の女性としての告白である。俳句という大切な心の拠り所を夫によって無残に粉碎された Mrs. Hayashi は、夫も知らない日本での自分の過去の秘密を Rosie に打ち明け、Mr. Hayashi との結婚が自殺の他にとりうる唯一の道だったと語る。Rosie が経験したばかりの

言葉を越えた恋愛のときめきが、Mrs. Hayashi の過去のロマンスとここで重なり合う。しかし、娘にとっては Jesus との一件が、将来に向かう希望の光であるのとは異なり、母にとって恋愛は既に過去のものであり、二度と実現することがないだろう。おそらく Mrs. Hayashi は、過去の挫折した恋愛の言語を絶した衝撃を、俳句の制限された言葉の中に込めてきたのであろうが、過去への唯一の窓口であった俳句も夫によって閉じられてしまったとき、娘に秘密を打ち明ける決心をする。

最後に母は、娘には決して結婚しないようにとの約束を迫る (“Promise me you will never marry!”) が、既に言葉を越えた恋愛のときめきを知ってしまった娘は、返答に窮する。Rosie は、Jesus のことを思い浮かべながらも、冒頭と同じように “Yes, yes, I promise.” と答え、母もこの答が “the familiar glib agreement” と了解している (19)。Jesus とのロマンスで感じた衝撃に酔いしれている Rosie にとって、結婚とは甘い恋愛の延長線上にあるハッピーエンディングであり、引き裂かれた恋愛と望まぬ結婚という運命を経験した母の言葉の意味が理解できたとは思われない。しかし、ここでの “Yes, yes.” は、冒頭のそれとは異なる。Cheung は、恋愛感情を経験していない子供の Rosie の “carefree narrative voice” である冒頭の答が、終結部では、既に性にめざめ、大人の女として歩み始めた Rosie の “adult cares” に満ちたものになると指摘する (42)。冒頭ではまだ親に依存した子供であった Rosie は、自己の発言に責任を持つ必要性はなく、また、俳句の日本語が理解できなくても彼女の今後の人生に大きな影響はない。しかし、Jesus との恋愛の歓喜に目覚めた彼女は、母の告白によって、その歓喜と引き換えに大人の女が背おわねばならない責任の重さと、文化を越えてすべての大人が避けて通ることのできない結婚という出来事の暗黒面を、夢ではない現実として突き付けられる。それでは、娘に過去の秘密を打ち明け、“Promise me you will never marry!” と言うことで、Mrs. Hayashi が意図したことは何だろうか。娘には自分の轍を踏ませたくない

という配慮からの助言なのか、娘の性愛への目覚めを察知して、軽率な行動を封じる意図なのか、無理解な夫への非難なのか、或いは、娘は結婚せずに自分のもとに留まって自分の理解者であってほしいという願いなのか。Rosieにとっても読者にとっても、Mrs. Hayashiの心理は何となくわかるものの明白ではない。母の告白は、一人の日系アメリカ人女性として親から独立し、親とは異なる人生を切り開いていく娘に、如何に生きるべきかを自分で責任をもって考え、模索しなければならないという自覚を促すことになるだろう。

物語の最後で Rosie は泣き出すが、それに対する母の反応は、“the embrace and consoling hand came much later than she expected.”と表現される(19)。この表現は、自分の感情をコントロールできずに泣き出し、まだ母のスキンシップを求める Rosie のまだ大人になりきれない部分を語るが、それと同時に、泣き出した娘に即座に手を差し伸べることのできない母の行為には、娘をいつまでも自分の手で守ってやりたいという感情を、娘は成長し、自分の手を離れて自立しなければならないという理性がしばし押しとどめるといふ、母の心の迷いが感じられる。娘は近い将来、自分の知らない世界へ旅立ってしまうであろうとわかっているからこそ、今自分の手を必要とする娘がいとおしい。簡潔で淡白な語りの中には、1世の複雑で切ない心情が込められている。

3) 自己主張——“Mrs. Higashi Is Dead”の Akiko

Mitsuye Yamada は、詩人として知られる日系アメリカ人である。1923年生まれで、若い頃収容所で過ごした経験を持つ彼女は、世代的には Yamauchi や Yamada と同じであるが、彼女の作風は二人の女性作家と大きく異なる。Stan Yogi は、Yamada のことを、日本(福岡県)生まれであるという点では厳密には1世であるが、年齢や経験からいえば2世であり、フェミニスト的あるいは反人種差別的関心を明確に示した彼女の作品は3世の活動家の視点を持つと言う(139)。多くの2世がアメリカに迎合し、収容所で

の体験を黙して語ろうとしなかった中で、Yamadaは、*Camp Notes and Other Poems* (1976) という詩集で自己の収容所体験と向き合い、戦時中に日系人がアメリカから受けた不当な扱いの実態を世に明らかにした。このような観点から政治的にアメリカを批判する Yamada ではあるが、批判的な感情を直接表現する彼女の精神性は、アメリカ的であり、これは日系3世に一般的な精神性に通じるものであるといえる。ここで取り扱う短編小説“Mrs. Higashi Is Dead” (1988, 以下“Higashi”)も、1世と2世が日本とアメリカの文化の間で微妙なバランスをとりながら、揺れ動くさまを、婉曲的な表現で描く Yamauchi や Yamada の作品とは大きく異なる。さながら広重の浮世絵の手法のように、トマト畑という広大な風景の中に人物を小さく配し、人物の行為は描くがその表情や感情ははっきりと見せない“Seventeen Syllables”とは違って、“Higashi”は、背景を殆ど見せず表情豊かで饒舌な人物の姿をクローズアップする。

“Higashi”に語り手として登場する2世 Akiko は、少女ではなく、結婚して3人の子供を育てながら職業を持つ大人の女性である。大学院出のキャリアウーマンである彼女は、未亡人となった1世の母をひきとって5年になる。彼女は、帰宅してから翌朝の出勤までは自分が家事育児をし、それ以外の時間は母に家のことを任せるという生活をしてきた。しかし、坐骨神経痛のためしばらく欠勤した彼女は、母と接する時間が多くなり、母娘ともに互いのそれまでわからなかった面が見えてくると、1世の日本的価値観と2世のアメリカ的価値観の間で、意見のくい違いが生じるようになる。物語は、この母娘間の摩擦を描く。成長し、社会の第一線で活躍し、母を扶養する立場にある娘の Akiko は、親の庇護のもとにあった *Soul* の Masako や“Seventeen Syllables”の Rosie とは異なり、母に対して率直に異議を唱え、主張する。更に、母が娘にひきとられるまでの長い別居生活や、娘のアメリカでの学歴の高さも影響し、母娘間の言語的ギャップは深刻なものである。英語も日本語も不完全ながら一応の親との意思疎通ができていた Masako

や Rosie とは異なり、成長するにつれて複雑化する思考をほとんど英語だけで行うようになった Akiko は、その高度な思考を日本語で表現できず、かといって英語で言っても母には理解できない。母もまた、英語をうまく話せず、日本語で言っても娘には正しく伝わらない。

Akiko と母の意識のずれが最初に表面化するのには、Akiko の大学院時代の友人 Dolores からの手紙である。家賃も払えない状態なので、よかったら少し金を送ってくれないかというこのおしつけな手紙に対して、母は「まあ、はじしらず」(60) という反応を示すが、友人のおしつけさが好きな Akiko は、日本の托鉢僧だって同じようなことをしていると反ばくして母を困惑させる。

「はじ」「じゃま」という日本語は、この物語で、母の日本的価値観を表す重要な言葉である。Akiko は、子供の頃近所にいた白人女性 Mrs. Stack から内緒でパンをもらい、母から、その行為は Mrs. Stack の「じゃま」をしているのであり、他人の「じゃま」をすることは「はじ」であると叱られた記憶を蘇らせ、これらの言葉が母により何度もくり返されてきたと振り返る (61)。しかし、このような日本的道徳は、Akiko には伝わっていない。Dolores に対して「はじしらず」と言った母は、実は Dolores の行為が Akiko の「じゃま」をしているから「はじ」だと言いたいのであるが、Akiko は、Dolores の、人に無償で何かを頼むという行為そのものではなく、謙虚ではない頼み方が「はじ」と解釈し、托鉢僧のことを持ち出すのである。

Dolores の好対照となるのが、母の昔の友人 Mrs. Higashi である。彼女は、Akiko たちに卵を配達していた日系 1 世の女性で、夫に先立たれた後女手ひとつで卵を売って 6 人の子供を育てていたが、生活苦のために子供を道連れに無理心中する。母は、この女性を日本語で「えらかった」と評するが、日本語が理解できない Akiko は、それが “Life was hard” なのか “Life was noble” なのかわからない (65-66)。しかし、母と娘の間を隔てるのは、言語の壁だけではない。Mrs. Higashi の死をめぐる Akiko と母

の意見は、1世と2世の社会的価値観の大きな違いを反映し、真っ向から対立するものである。母は、だれの助けも借りずにひとり努力し、他人の「じゃま」をして「はじ」をかくことよりも死を選んだ Mrs. Higashi の生き方を「偉い」と感じ、彼女は他にとるべき道がなかったから「死んだ」(“Mrs. Higashi is dead.”) と言う。しかし、自殺は罪であるというキリスト教的教育を受けてきた Akiko にとって、Mrs. Higashi の行為が “noble” であるという感覚はなく、この女性は自らの意志で自らの命を絶った(“she killed herself”) のであり、「死んだ」のではない(66)。Akiko としては、だれかに助けを求めて生き抜くという努力を放棄し、幼い子供達の命まで奪った Mrs. Higashi の行為こそが “shame” であると感じているのではあろう。

この短編には3世の子供達も登場するが、この中では特に末っ子の June を含めた3世代の關係に注目すると興味深い。4歳位の女の子 June は、生まれた時から祖母の恩恵を最も多く受けながら、祖母には最も服従しない。Akiko が子供のころは、Mrs. Stack にパンをもらって叱られるとしょんぼりしていたが、June は、幼少期の母と同じように白人女性からキャンディをもらおうとして祖母に “Shame on you” とたしなめられても、“she wants me to bother her.” と、自分なりの理屈をつけて開き直る(63-64)。Akiko の幼少期には、親には従うべきだという義理の道德感や、母の気持ちを損ねたくないという、他人の気持ちを思い遣る主観的な人情のようなものがあるが、June には、まず客観的に物事を判断しようという態度が身についている。また、1世と2世は、3世の教育の面でも衝突する。部屋を片付けない June に対し、1世の祖母は片付けろとうるさく言い、片付けない場合は祖母自ら片付ける。2世の母は、June が片付けないと不平を言う1世に、乱雑な部屋を見たくなければドアをしめればいいと冗談を言う(64)。2世とすれば、子供部屋の整とんは子供自身の責任だということであろう。

文化と言語の二重の壁を感じながら、最終的に1世は娘から離れてひとりで暮らす道を選ぶ。彼女は、Dolores の手紙と Mrs. Higashi の思い出をめ

ぐる娘との議論から、自分の価値観が娘には伝わらないことを感じ、更に、3世の育児の点でも、娘とは意見が合わないことがわかった。娘の家庭は、母にとって文化的にも言語的にも紛れもないアメリカという異国であり、その中で母は、日本的価値基準に基づいて行動する自分だけが minority であったということに気づいたのである。そして、自分なりの方法で娘たちの役に立とうと一生懸命努力した自分の行為が、実は娘たちには迷惑な「じゃま」であったと感じたのであろう。このまま娘と対立して娘の家庭に波風をたてて生活しても、「はじ」をさらすだけだと思った母は、自分にとって何よりも大切な日本の価値観を後の世代に引き継ぐことを諦め、minority としての本分を弁えておとなしく引き下がり、ひとりで生きることを「覚悟」する。この母の生き方は、20世紀中盤、アメリカ合衆国に抵抗せず、権利も主張せず、謙虚に黙々と努力を重ね、“model minority” と評せられた日系をも含むアジア系アメリカ人という民族集団の具現といえよう。そして、「覚悟したよ」という母の言葉に対する娘の反応は、アジア系アメリカ人たちの沈黙の理由を問うことのないアメリカ合衆国を彷彿とさせる。「覚悟したよ」という日本語は、娘に言語としては伝わっても、心情として訴えかけてはいないだろう。娘は出て行く母を引き止めることなく、新たな人生を送ろうとする母の決心を前向きに捉え、“wonderful” だと言う。そしてきわめてアメリカ人らしく、“We will help you with the rent.” という実際的なひとことを付け加えるのである (67)。

以上見てきた文学作品の中には、日本の価値観を次世代に伝授することを希望しながらためらう1世と、日本的な価値観を認めながらもアメリカ社会を生き抜く方便としてそれを否定し、アメリカ人になろうとする2世の間の葛藤があった。対立する両者ではあるが、自己の中にある日本という部分を日系人社会の外へ表出することを拒み、アメリカへの同化を肯定したという点では共通している。彼らは戦時中の収容体験や、その前後の差別について、

恥と感じ、それを語ろうとはしなかった。1世はそれらの暗い過去を意識の中にしまいこみ、2世はそれを忘れて新たな人生を歩もうとした。

しかし、後に3世は、1世や2世の沈黙を破ることになる。“Higashi”における June に垣間見られるように、日系3世は2世よりも更に率直に自己主張し、義理や人情よりも客観的正義を追求するようになる。公民権運動の時代に青春期をむかえる3世たちは、1世や2世が恥として語ろうとしなかった差別や収容の歴史に眼を向け、他の minority 集団とも協力してアメリカ政府に抗議した。彼らは“model minority”という見せ掛けの名誉を捨て、ひとつの minority 集団としての権利を主張し、彼らの両親や祖父母が受けた苦しみに対する補償を求めた。3世はもはや *Soul* の Hana の言う、風にしなう竹のように、黙って耐えることはない。日系人を差別したアメリカ合衆国という国が、しなわぬ竹を折る日本とは異なり、風にしなわずとも折れずに戦い主張する自由と機会を与える場所でもあるということに、3世は気づいたのであろう。

引用文献

Primary Sources

Yamada, Mitsuye. *Camp Notes and Other Writings*. Shameless Hussy Press, 1976. New York: Kitchen Table Women of Color Press, 1992. New Brunswick: Rutgers University Press, 1998.

Yamamoto, Hisaye. “Seventeen Syllables” and Other Stories. New Brunswick: Rutgers University Press, 1998.

Yamauchi, Wakako. *Songs My Mother Taught Me: Stories, Plays, and Memoir*. New York: The Feminist Press at the City University of New York, 1994.

Secondary Sources

Cheung, King-Kok. *Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Jo Kogawa*. Ithaca: Cornell University Press, 1993.

- Kim, Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple University Press, 1982.
- Kingston, Maxine Hong. *The Woman Warrior: Memoir of a Girlhood among Ghosts*. 1975. New York: Vintage Books, 1989.
- Wong, Sau-ling Cynthia. *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance*. Princeton: Princeton University Press, 1993.
- Yamamoto, Traise. *Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body*. Berkeley: University of California Press, 1999.
- Yogi, Stan. "Japanese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. Ed. King-Kok Cheung. Cambridge University Press, 1997.